
花屑プロローグ2 走っていくどこまでも

霧香 陸徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花屑プロローグ2 走つていぐじこまでも

【NZコード】

N3887D

【作者名】

霧香 陸徒

【あらすじ】

花肩に所属する「芽衣」は一人戦場を歩いていた。一人の少年と出会い、そして「敵」とも出会いってしまう・・・

栄光に向かつて走る
あの列車に乗つていこう
裸足のまま飛び出して
あの列車に乗つていこう
見えない自由が欲しくて
見えない銃で撃ちまくる
本当の声を聞かせておくれよ・・・
そんな詩を何処かで聞いた事がある気がする。
それはいつだつたか・・・。
大好きだつた父が歌つていた歌だつただろつか・・・。

古ぼけたジャケットに、悲しいよつて逆に元気な弾みのあるテンポでその歌を聴いた気がする。

私はある隊の狙撃手で、銃の扱いには慣れていたが、その銃で致命傷を与える事には慣れていなかつた。

その銃で狙うのは相手の敵意。 それさえ撃ち貫けば、私は生きながらえていける。 何も命まで奪う必要は無いハズだ。

自由が欲しくて・・・。 打ち続ける銃で、私は何人もの敵を打ち倒してきた。

その銃では相手の痛みを知る事は出来ない。 ただ、無機質な音と共に有机質な「物」を地に伏せさせるだけだ。

だけど、両手は銃を構えているから・・・音までは消しおつてくれない。 目を閉じても聞こえてくる・・・悲鳴。

聖者にはなれない。 だから、いや、だけど生きている方がいい。誰も死なせたくない。

でも、私には居場所が無くて、人を傷つける軍隊に所属している。

「そんな甘い考えだと、貴様いつか命を落とすことになるぞ!」

そう言つて私の頬を叩いた前期の隊長は私より先に命を落とした。

だけど、それは彼の考えが間違っていたという証明では無く、ただ運が悪かっただけだ。

今の隊長は私を認めてくれているけど、彼女が死なないのは運があるだけだ。

そんな答えがどちらでも良いかのように、人は死に、そして生きる。

「おねーちゃん。 兵隊さん？」

小さな子供が居た。

まだ5つぐらいの男の子だった。

私の軍服のズボンを引っ張つて見上げてくる。

「うん。 君は何歳？」

「ほく～？ え～と、え～と……。 あははわすれちゃつたあ～

「わう・・・。 母さんとお父さんは？ 君一人？」

「・・・・・うん。 この前黒くなつて動かなくなつたんだよ。 ずっと動かないから僕一人で来たんだ。 えらいでしょ？」

「・・・・・ビッシュ！」

「・・・・・」に行けってお母さんが言つたんだよ。 黒くな

る前に」

男の子の目には涙も無かつた。今おかれている現実を受け入れられないのか、それとも理解出来ていないのか……。たぶん後者だろう。

「……此処は戦場だから、此処じゃなくて兵舎まで行かないといけないね。僕、まだ歩ける?」

「うん。お姉ちゃんありがと」

ありがとうなどと言われたのは何時ぶりだろう。その姿は汚れきっていたけど、男の子の目はとても綺麗に輝いていた。

だから 少し胸が痛んだ。

これからこの子は兵舎に連れて行く。

そうなれば民間人としてではなく兵隊として育てられることになるだろう。

一人でも多くの戦力が欲しい時代だ。民間人も軍人も無い。ましてや、国民全員に徴兵勧告がなされているので、それ以外は非国民として国家に追われる生活をするだけだった。

そうやって、陰に隠れて生きる人々を臆病者だと笑う者がいる。

実際は軍規に従いながら生きている私達の方がよっぽど臆病者だとこうのに……。

ズキューーン！

銃声が響いた。

悠長に考え事をしながら歩いている場合では無かつたようだ。
私は男の子の手を引いて走り出す。

歩幅が合わなくて何度も転びそうになる男の子。

抱えた方が早い！？

また銃声。 近い。

走りながら装備を確認する。

セミオートの短銃が一丁。 アーミーナイフが一刀。
後は・・・TAMの起動リモートコントロール。 TAMとは我
が部隊の主力となる機動兵器の一つだ。 人型のロボットだと言え
ばわかりやすいだろう。

それを使っても基地から現地まで到着するまでに私は物言わぬ人
形となつていてるかもしだれない。 いちいち呼び出して使うのは、ま
だまだ実用性に改良の余地がある。

私は男の子を引っ張る手に力を込めながら、空いた手で短銃を取り出した。

中に入っているのはもちろん実弾だ。訓練弾では無い。

当たり所が悪ければ相手を×してしまったり。

だが、やらなければやられてしまう。

私は保険としてTAMのスイッチも押しておぐ。

これで数分後には基地から射出されるだろ？

敵は・・・、気配からどうやら二人ぐらいだと感じた。

巡回中か何かに見つかってしまったのだろうか・・・。運が悪い。

後ろから追つてくる気配に焦りながらも足を前に動かす。止まつたら・・・命は無い。

威嚇射撃で数発後ろの敵へ撃ち込んですぐに前に走り出す。

・・・・実際には止まらなくても命は無かつたのだが。

後ろばかり気をとられていて前から近づく人影に気付かなかつた。

その者はもちろん味方ではなく、私はその敵に自分から飛び込む
ような事をしてしまったのだ。 その反動で短銃を取り落とす。

すぐにナイフに持ち替えようと手を伸ばすとその手を掴まれてし
まつた。

腕が折れそうなぐらいに強く握られて痛い。

「あん？ なんだ 国の者か。 もう一人はガキ・・・けつ！
男かよつ！」

敵の男は私達を舐めるように観察すると、そつ吐き捨てて、手に
持っていた銃を・・・撃つた。

グシャ！

サイレンサーが付いていたのか発砲音は無かつた。 だから、現
実味の無いそんな何かがつぶれたような音が聞こえてきた。

・・・・・

真横から

「女あ！ お前はウチの隊で「働いてもらひ」ぜえー。」

敵の男が何か言っている。 男が言つ「働く」とは別に寝返つて
戦えと言つてはいるわけじゃない。

・・・・・下衆野郎。

反射的に殴り飛ばしてやりたかったが、どうにも捕まれた腕は動かさうに無かつた。

そんな事より、私は足元が赤く染まってしまった事の方が衝撃的だつた。

その事を私の脳はどう処理しているのか・・・。自分の事なのに、何も分からなくなつてしまつた。強烈な吐き気を感じた。
「最近お前等の国に女だけのチームだかなんだか出来たらしいじゃねえか？ 要はオトリ部隊だろ？ かわいそうになああ～？ ト力ヶの尻尾みたいに切り落とされる役なんてなあ～。 そうだあ～あの名前はなんつたつけえ？ 鼻紙だつたかあ！」

嫌らしくて口付きた口調と手付きて言つてくる男。

「……」

私はそれに弾かれた様に反応していた。

露出が少なく硬い材質の軍服からでも充分不快だつた。

更に不快だつたのは、彼の最後の言葉だ。
鼻紙と言つた。

私はそれが許せなかつた。

彼が言つた言葉は私ではなく、私の隊長への侮辱だつたのだ。

自分は何を言われても、何をされても構わない。
だけど私の居場所を！仲間を侮辱する輩は許さない！！

。 。 。

死ぬヤツは運が無かつたからだ。

私は運が悪い方だから良く死にかける。

今だつて少し横にずれていたら死んでいただろう。

私の横には……

呼び出しておいたTAMが鎮座していた。体長7m程の小柄な機体だが敵を圧死させるには十分の大きさだった。

先程の男はTAMの下敷きになつて死んだ。タイミングとしては最悪で最高。

銃で引き金を引いたのとなんら変わりも無い状況だからだ。

彼が死んだのは運が悪かつたからだ。

「TAM・07ヒナギク・・・

私は愛機の名を呟いていた。テクニカルオートマーターの7号機。機体は白を基にしたカラーリングで、足元の血が余計に目立つてしまっていた。

遂に汚れてしまつた。
敵の血で・・・。

• • • • •

私は無言でTAMのゴッケビットへ乗り込んだ。

敵はまだ居る。

死ぬわけにはいかないのですばやく乗り込み、サーチシステムを立ち上げる。様々な電子音と共に出された検索結果は私を中心に10人程の敵と3体程の旧式の敵TAMが居るようだ。

「・・・・・帰還します」

「サー・メイ[軍曹]

この程度なら抜けられる。これ以上この機体と私の心を汚したくはない。

帰還するため機体が立ち上がる。

すると、その下敷きになつていた者の姿があらわになる。
敵の兵と・・・・・男の子であつた「物」。

あの男子の子も運が悪かつたからだと言うのか！

「サー・メイ軍曹。これより敵を殲滅します」

「プロジェクト・メイの解除を許可します。」

一
サ
一

プロテクト・メイ。私が組み込んだプログラムで自動的に相手のTAMの間接部分を狙うように設定してあるプログラムだ。その他に歩兵部隊には当てないように威嚇射撃するように設定してある。

それを解除だ。

皆殺しにしてやるのだから・・・。

私に出会った事がお前達の運の尽きだつたんだ！

5分後

破壊を須へしたTAMが活動を停止していた。性能の差でTAMが

はまつたく無傷だ。

・・・傷があるとすると・・・。

「ヒナギク。 基地への帰還」

「サー・メイ軍曹。 お疲れ様です」

ただのオペレーターシステムの癖に「お疲れ様」なんて言つ。特に感情があるわけでは無く、そういうプログラムだ。もし、感情があつたなら・・・いつもと違う命令をした私へ何か言ってくれたのかもしれない。

・・・・・

私は基地へ帰還した。

弱い者たちが夕暮れ 更に弱いものを叩く その音が響き渡ればブルースは加速していく

見えない自由が欲しくて 見えない銃を撃ちまくる

本当の声を聞かせておくれよ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887d/>

花屑プロローグ2 走っていくどこまでも

2010年10月11日08時08分発行